

<原著>

“ユマニチュード”の哲学と、教員に求められる資質能力の育成
～社会福祉学部の教職課程における教員養成からの一考察～

野本 玲子

Upbringing of Competency demanded as a Teacher
by applying the Philosophy of “Humanitude”
～ A Consideration from the Teacher-Training Course of the Social
Welfare Department ～

Reiko NOMOTO

The philosophy of “Humanitude” is very effective as a technique of care for dementia, and so we examined the significance and possibility of incorporating this philosophy into teacher training to educate students at elementary and secondary schools.

In the teacher training course at the Faculty of Social Welfare, we cultivated the competency concerning “human dignity” and gained insight to visualize and utilize the “teacher image aiming to train” in the future.

Key words : Humanitude, teacher training, competency, teacher image aiming at upbringing

ユマニチュード, 教員養成, 資質能力, 育成を目指す教師像

要 旨

認知症を中心としたケアの技術として効果を得ている「ユマニチュード」を哲学として捉え、小中高等学校の児童生徒を教育する教員養成に取り入れることの意義と可能性について検討した。

その結果、社会福祉学部における教職課程で「人間の尊厳」に関する資質能力を育成し、今後の大学教職課程における「育成を目指す教師像」を可視化して活かすための知見を得た。

1. はじめに

教員に求められる資質能力は、きわめて広範囲に及ぶ。いつの時代にも求められる教育者としての使命感、成長・発達についての深い理解、教育的愛情、専門的知識、教養、これらを基盤とした実践的指導力に加えて、現在の日本においては特に変化の激しい時代であり、子どもたちに自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育成する教育を行うことが期待されるため、幅広い視野を教育活動に積極的に生かせるような資質能力をも十分に兼ね備えていなければならない。

現在、大学における教員養成においては、このような資質能力を身につけるために、各種法律、学問理論の理解、教科の専門性と教育方法による授業づくり、児童生徒の一人ひとりを理解した学級づくり、教職員としての教育活動、役割、職務内容などをさまざまに学びながら、教師に必要な力を生涯努力して身につけていく心構えや方法についてまで、多面的・多角的な学びが求められている。特に、体罰やいじめ問題などの現代社会的課題も解決し、さまざまな特質を持つ子どもたちも一緒に、共に学び共に育つことができるような支援や配慮が自然におこなえる、人への尊厳がベースとなる基本的な教育態度が必要とされる。

支援学級における教育はもとより、通常の学級においても、発達障害など特別支援の必要な子どもへの対応を含めて、インクルーシブな教育に向けて「合理的配慮」が求められるようになってきている。また、授業のユニバーサルデザイン化は、すべての子どもたちの学びやすさの配慮ともなる。

ところで、我が国では、高齢化の進展に伴い認知症患者数が増加している中で、認知機能の低下した患者が、治療・処置や看護援助の意味を理解できないため、虐待のように見える強さで処置や看護が行われたり、やむを得ず一時的に身体拘束や薬物投与に頼ったりする状況に陥ることがある。社会福祉の中の介護、医療の中の看護の分野で、「ユマニチュード」のケア技術の効果が注目されている。

筆者が、認知症の親の介護で、コミュニケーションの取り方と本人にとって幸せな生活はどういうものかを模索しながら、中学校現場の通常学級と支援学級でさまざまな特性、発達障がい、ダウン症や知的障がい、情緒障がいの子どもたちに寄り添って学ぶ中で、強く

感じることもある。認知症を介護する人間と、子どもたちを教育する教師として、必要なものや求められるものの共通性である。それは、方向的には「方法（メソッド）」としてまとめることが可能な部分があるが、もともとは、人をどうとらえ何を大事にするかという思想や「哲学」の問題である。

本研究の目的は、現在認知症を中心としたケアの技術として効果を得ている「ユマニチュード」を哲学として捉え、小中高等学校の児童生徒を教育する教員養成に取り入れることの意義と可能性について検討することである。このために、社会福祉学部における教職課程の教職概論でユマニチュードの4つのメソッドに関係する課題を実施し、その気づきから育成されることが予想できる資質能力を考察し、今後の「育成を目指す教師像」を可視化して活かす知見を得たい。

2. ユマニチュードの概要と認知症

2. 1 ユマニチュードとは何か

ユマニチュード (Humanitude) は、フランスのイブ・ジネスト (Yves Gineste) とロゼット・マレスコッティ (Rosette Marescotti) の2人によって開発された、知覚・感情・言語による包括的コミュニケーションにもとづいたケアの技法である。この技法は「人とは何か」「ケアをする人とは何か」を問う哲学と、それにもとづく150を超える実践技術から成り立っている。体育学の教師だった2人が1979年に医療施設で働くスタッフの腰痛予防対策の教育と患者のケアへの支援を要請され、医療及び介護の分野に足を踏み入れ、その後35年間、ケア実施が困難だと施設の職員に評させる人々を対象にケアを行ってきた。その経験の中から生まれたケアの技法がユマニチュードである。

ユマニチュードという言葉は、フランス領マルティニーク島出身の詩人であり政治家であったエメ・セゼールが1940年代に提唱した、植民地に住む黒人が自らの“黒人らしさ”を取り戻そうと開始した活動「ネグリチュード (Negritude)」にその起源をもつ。その後、1980年にスイス人作家のフレディ・クロプフェンシュタインが思索に関するエッセイと詩の中で、“人間らしくある”状況を「ネグリチュード」を踏まえて「ユマニチュード」と命名した。

さまざまな機能が低下して他者に依存しなければならない状況になったとしても、最期の日まで尊厳をもって暮らし、その生涯を通じて“人間らしい”存在でありつづけることを支えるために、ケアを行う人々がケアの対象者に「あなたのことを、わたしは大切に思っています。」というメッセージを常に発信する。つまり、その人の“人間らしさ”を尊重し続ける状態こそがユマニチュードの状態であると、イヴ・ジネストとロゼット・マレスコッチェは1995年に定義づけた。これが、哲学としてのユマニチュードの誕生である。

ユマニチュードを日本の看護・介護の現場に紹介したのは、国立病院機構東京医療センターの本田美和子である。フランスと同様の成果をあげられることを実際に経験し、その技法を学んだ仲間と共に日本支部の設立をおこなった。「ケア介入の効果がときに劇的であることから、“魔法のような”と呼ばれることもあります。しかし、ユマニチュードは決して“魔法”などではありません。誰もが学ぶことができ、実践することができる、具体的な技術です。」と、本田は述べている¹⁾。

ただ、着目したいのは、ユマニチュードは、本田が言うように「技術」あるいは方法（メソッド）に焦点があたりがちだが、ジネストは、「われわれが同じ種に属するものとして

相互に認識しあえるようにする、人としての特徴や絆を理解しようとする哲学に基づくもの²⁾と述べていることである。しかし、この点、坂本は、ユマニチュードが、ケア的態度とケアのメソッドの両方について語り、一方で、ケア的態度を簡略してメソッドを強調した紹介の仕方をするについて疑問を投げかけている³⁾。ジネスト自身はその意図について詳細には説明していないが、介護者・看護者は、ユマニチュードを強調されたメソッド⁴⁾に留まるものと誤解する懸念がある。坂本は、ユマニチュードがケア的態度を軽視しメソッドを強調するような表現になっていることの要因として2つあげている。1つめは、ユマニチュードが信頼という人間の感情を動かす行為であるということである。認知症患者は、今の環境になじめず新しい情報を保存することが難しいことから、混乱と不安が大きく、言葉によるコミュニケーションが難しいため、感覚的刺激によって患者の気持ちよい情動に働きかける方法をとる。相手を思う気持ちはあっても、細やかな方法が伴わなければ、患者の信頼を得られない。したがって、工夫改善をした結果、メソッドの強調によって、ケア的態度を同時に伝えることが可能だと考えた。また、2つめは、「ユマニチュードはケアに関わる医療従事者だけでなく、関心を持つそれ以外の人をも対象としているために、相手との関係性を築きたいというユマニチュードのケアや態度の基盤は既にできているとジネストが感じたのかもしれない」と坂本は述べている。結論として、「ユマニチュードのケアの概念について立ちかえることは、認知症患者へのケアに限らず、他者（人間）に対して援助することへの理解と実践、そして相手のとの関係性の構築に役立つことが期待できる。また、医療の進歩による高度な医療技術を必要とされる医療の現場

では、看護の原点となる相手への細やかな配慮や気遣いなどが失われないための警め（原文ママ）になるといえる」と指摘した³⁾。

筆者も、ユマニチュードの本質は、人間を尊重する態度の「哲学」にあるととらえる。その上でなお、その想いや気持ちを相手に伝える工夫として「メソッド」という形に具体化、可視化するという方法を教育に取り込む必要性を考える。

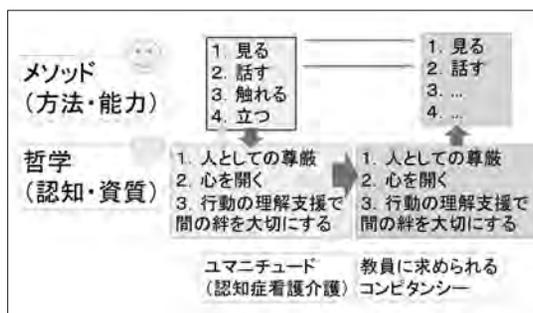


図1 “ユマニチュード”と教員に求められるコンピテンシー (野本,2017)

2. 2 認知症の状態と子どもたちの発達

認知症としては、ICD10（国際疾病分類10版）やDSM-5（アメリカ精神医学会精神医学診断統計便覧第5版）によると、記憶や認知機能の低下に加えて、「日常生活動作の障害」「社会的または職業的機能の著しい障害」が提示されている。厚生労働省の定義では、「生後いったん正常に発達した個々の精神機能が慢性的に減退・消失することで、日常生活・社会生活を営めない状態」（厚生労働省、2011）としている。すなわち、記憶や認知機能の低下だけでなく、日常生活、社会生活に困難があるために、なんらかの他人の援助を必要とした状態であるということである。認知症ケアは、種々の能力としてはマイナス方向に向かっている人間への援助であり、学校教育は、プラス方向に向かっている未完成的子どもたちへの人格の完成を目指す発達促進

援助である。すなわち、成熟した大人を相対的に完成に近いと捉えるならば、そうではない状態の人間に対して、対象を尊重して支援助し、共に生きるのだという視点が共通する。

3. 認知症に対するユマニチュードをどのように児童生徒に活用するか

3. 1 接し方と捉え方

ユマニチュードの基本的なメソッドには、4つの柱がある。それは、1「見る」2.「話す」3.「触れる」4.「立つ」である。順に、簡単にその接し方と、ベースとなる捉え方を教員の視点で見えていくことにする。

3. 1. 1 「見る」

ユマニチュードでは、「見る」という行為が相手に与えるメッセージをポジティブなものとしてとらえ、ネガティブなものとしてとらえるものと2つに大別している。水平に目を合わせて「平等」を、正面から見ることで「正直・信頼」を、顔を近づけることで「優しさ・親密さ」を、見つめる時間を長くすることで「友情・愛情」というポジティブなメッセージを伝えることができる。

逆に、垂直に見下ろすことで「支配・見下し」を、目の端で見るような横からの視線で「攻撃」を、遠くから見ることで「関係性の薄さや否定的な意味」を、ちらっと身近に視線を投げかけることで「恐れ・自信のなさ」というネガティブなメッセージを相手に伝えることになる。

「見る」という行為は、ケアの現場だけではなく、日常生活でもさまざまな感情と他者との在り方を伝えているわけであるが、ユマニチュードの考え方ではさらに重要な点を指摘している。すなわち、「相手を見ない」ということは「あなたは存在しない」というメッセージを発していることにほかならないとい

うことである。人としての存在とその尊厳を確認するための行為、言い換えると第2の誕生をもたらす「見る」行為、すなわちアイコンタクトが、看護の現場で非常に短時間しか行われていないことを示している。「ケアをする職業人」は自分に攻撃的で苦手な人に対しても「あなたはここに存在する」というメッセージを届けるために、「見る」ことを学び直す必要を説いて、その具体的な技術を教示しているのである。

教員としては、授業内容を全体に伝えるための視線は送る、あるいは個別に注意が必要な子どもに対しては目を合わせる。しかし、これらは授業の進行上の必要でおこなっている場合が多い。授業中、全員一人ひとりにその「存在を意識していることを伝える」ため、そのこと自体の重要性を再確認すべきであり、そこにZの字で教室を見渡すなどの技術や机間指導の方法が出てくる。

さらに、視線を合わそうとしない生徒に対して、いかに視線でのメッセージを伝えるかということも重要である。

3. 1. 2 「話す」

「見る」と同様、「話す」ことにも声のトーンや言葉の優しさで相手に伝えるメッセージがあるわけだが、同じく最も悪いことは、相手を見殺しにして話しかけないことであり、「あなたは存在していない」というメッセージを発することにほかならないとしている。「話す」においても看護の現場ではごく短時間しかコミュニケーションが交わされていないという調査結果を示し、反応がない人にも話しかけて「絆」を結ぶことが仕事なのだと言っている。しかしながら、言語によるメッセージは、受け取り手から言語あるいは非言語による意味のあるフィードバックがなければ送り手はコミュニケーションをあきらめてしま

うのも当然であるため、オートフィードバックの技法を開発し、紹介している。すなわち、実施しているケアの内容を、ケアを受ける人へのメッセージとして予告と実況中継をすることである。

教員においては、コミュニケーションを必ずしもキャッチボールのように行ったり来たりすることを当然と捉えず、あきらめずに共有しようとする態度として学ぶことができる。伝えようとしたことに対して望むような反応がない場合に、とにかく伝えるという行為を避けがちになるが、いかに継続し続けるモチベーションを自分の中に築けるか、また相手との間の「絆」に着目した行為に工夫ができるかという捉え方である。

3. 1. 3 「触れる」

「触れる」ことにも、「優しさ」「喜び」「慈愛」「信頼」が込められる「広く」「柔らかく」「ゆっくり」「なでるように」「包み込むように」というポジティブなメッセージを伝える触れ方と、「怒り」「葛藤」を伝えるような「粗暴」で「拙速」で接触面積が「小さく」圧力が「強く」「急激な」動作で「つかんだり」「引っかけたり」「つねったり」するようなネガティブなメッセージを伝える触れ方とがある。具体的に、相手に触れる方向や「離着陸のようなイメージ」で優しく触れること、強く握ってしまわないために「親指を手のひらにつけて、絶対に使わない意識」などの技術を示しながら、そのベースには、ケアを受ける人を驚かすことを防ぐような配慮が理解できる。

教員においては、児童生徒に触れることには細やかな配慮が必要である。体罰に関する知識は当然であり、また男性女性の意識についても、中学生高校生の思春期はもとより、小学生においても自分本位な解釈ではなく、受けとめる子どもの気持ちに寄り添った対応

が必要である。さらに、特に発達障がいのある子どもにとっては、触れられることそのものを大変不快に感じる特質のある場合もある。高圧的な力の指導が子どもたちの心を開き主体的な学びにつながることはない。それらのことを前提にして、たとえば体育大会で協力できた感動を伝えあって喜びを共有したり、しなければならぬとわかっているにもかかわらず切り替えにくい子どもへのきっかけとして行動を促したりする時に、「触れる」という行為にはエネルギーがある。また、人と人とが触れることによって安らぎを感じることは人として自然であり、教員として有効な教育手段である場合が多い。触れることで、想いが素直に伝わるような関係づくりと、目的に合った具体的な方法を研究して学ぶことも必要となる。

3. 1. 4 「立つ」

これまでの3つの柱に加えて、ユマニチュードでは「立つ」ことによってあなたとわたしが互いに同じ人間であるという意識が芽生え、空間認知が生まれ、内と外の世界を知覚し、歩くことで「社会における自己」を認識し、このことが「人間の尊厳」につながるとしている。

学校教育の場では、特別支援の必要な障がいや病気の場合には寝たきりであることもあるが、一般的な教室での授業においてはこの「立つ」ということへの意識は、普段はあまり持つことが多くない。授業の初めと終わりに「起立」の号令で挨拶をすることや、発言する時には「立って」椅子を入れさせるなどという、授業規律として考える程度であるかもしれない。しかしながら、もう一度見直すことで、自己アイデンティティを発見する可能性がある。心が萎縮したようになり自己肯定感が下がっている子どもを、立たせて「同

じ人間なのだ」という対等な存在である意識を持たせることがある。立位は、骨や人体や筋肉に負荷をかけることによって、あるいは、呼吸機能、血液などの循環機能、皮膚、神経などに影響を与えることで、自分が生きるということを感じ覚的に呼び戻させることがある。赤ちゃんについて、ジネストは「立って歩く運動と感覚によって知能は向上し、距離や時間を学んでいくのである。」と述べているが⁵⁾、小中高校生の発達段階においても「立つ」行為は、心身ともに「自立」に影響がある可能性がある。

4. 教員に求められる資質能力

4. 1 「教員に求められる資質能力」の分析

4. 1. 1 いつの時代にも求められる資質能力

教員の資質能力とは、第1次答申において示されているとおり、一般に、「専門的職業である『教職』に対する愛着、誇り、一体感に支えられた知識、技能の総体」といった意味内容を有するものと解される。学校教育の直接の担い手である教員の活動は、人間の心身の発達にかかわるものであり、幼児・児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような専門職としての教員の職責にかんがみ、昭和62年12月18日付け本審議会答申「教員の資質能力の向上方策等について」において示されているとおり、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力といった能力がいつの時代にも教員に求められる資質能力であると考えられる。

4. 1. 2 今後特に求められる資質能力

これからの教員には、変化の激しい時代にあって、子どもたちに自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育成する教育を行うことが期待される。そのような観点から、今後特に教員には、まず、地球や人間の在り方を自ら考えとともに、培った幅広い視野を教育活動に積極的に生かすことが求められる。また、教員という職業自体が社会的に特に高い人格・識見を求められる性質のものであることから、教員は変化の時代を生きる社会人に必要な資質能力をも十分に兼ね備えていなければならず、これらを前提に、当然のこととして、教職に直接かかわる多様な資質能力を有することが必要である。

平成29年中央教育審議会の論点整理では、新しい学習指導要領等が目指す姿の中で、児童生徒に育てるべきコンピタンス(資質能力)についてまとめられている。⁶⁾



図2 児童生徒に育成したい資質能力の3つの柱
(文科省 中央教育審議会初等中等教育分科会 (第100回) 配布資料 教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料1 新しい学習指導要領等が目指す姿,2017)

「コンピタンス」は、もともとは、マクレランドの研究などで、職能や人生における成功を表していた言葉だが、知識やスキルといった認知的な側面だけではなく、態度や人

格特性、動機付けなども含む非認知的な側面(情意的、社会的側面)も含んだものとして捉えられ、「どう用いていくのか、活用していくのか」という側面が強調されている。

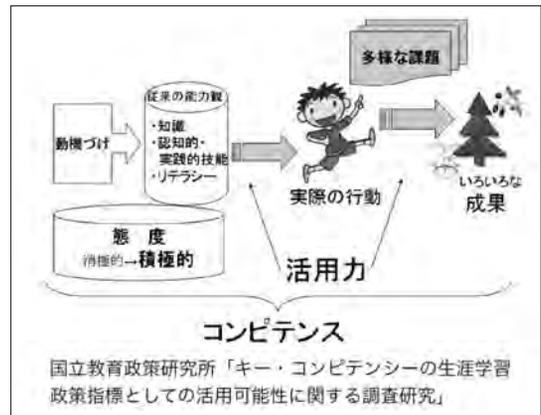


図3 キーコンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する調査研究

コンピテンスそのものは、経済界の次世代を担うグローバル資本主義を支える、地球的市民の人材育成を要求するものである。しかしながら、教育は当然、社会のニーズに応じるためだけにおこなわれるのではなく、個人の人格完成を目的とし、個人が社会の中で幸せに生きるための資質能力を育成する視点が重要である。

では、そのような教育をおこなうためにもっとも必要な「教員の資質能力」は、何であろうか。それが、「人間としての尊厳を尊重する態度」すなわち、ユマニチュードの哲学だと考える。

4. 2 障害者の権利に関する条約における「合理的配慮」

「障害者の権利に関する条約」の「第二十四条 教育」においては、教育についての障害者の権利を認め、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基礎として実現するため、障害者を包容する教育制度(inclusive

education system) 等を確保することとし、その権利の実現にあたり確保するものの一つとして、「個人に必要とされる合理的配慮が提供されること」を挙げている。「合理的配慮」とは、「障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう」と定義されている。具体的には、(ア) 教員、支援員等の確保 (イ) 施設・設備の整備 (ウ) 個別の教育支援計画や個別の指導計画に対応した柔軟な教育課程の編成や教材等の配慮である。このことについて、特別支援学校以外の小中学校現場では、なかなか理解を示すことができない教員が存在するが、大学の教員養成課程において、児童生徒一人ひとりの状態及び教育的ニーズ、学校の状況、地域の状況、体制面、財政面等を考慮しながら、人としての尊厳を第一に考えて工夫し、バランスの取れた判断ができるケアの実体験と福祉の目を備えた思考の訓練が必要である。

4. 3 本学における教職課程のカリキュラム

社会福祉学部の中に設置している健康スポーツコミュニケーション学科で本学の教職課程をとる学生は、一般的な教職関連科目のほかに、学科コア科目として、健康福祉論、社会福祉原論、ソーシャルワーク原論、コミュニケーション基礎、生涯スポーツ、高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉、アダプテッドスポーツ、医療福祉論、介護予防運動指導法、健康運動指導法等、また社会福祉領域のさまざまな実習、福祉行財政や、福祉計画等さまざまな理論を学び、演習をしている。一例として、キャリア演習において、車椅子体験等

の中で、実際に見えるものと、目を閉じた状態でも見えるもの（たとえば、車椅子に座っている方の足先は、押す人間にとっては死角となり実際に見えないこともあるが、相手を大切にするという心を持てば、足先をどこかにおつけないように配慮するという見え方ができるはずだということ）について考え、「見る」という行為について深く考え、感じている。特別支援教育として教育者の視点ではなく、福祉介護の心理としての学びが、バランスのよい気づきをもたらしている。

4. 4 本学教職課程「教職概論」における試み

社会福祉学部健康スポーツコミュニケーション学科後期履修科目である「教職概論」（1年生52名4年生3名受講）において、ユマニチュードの4メソッドに関連する学校現場の課題を与え、ロールプレイなどの体感からの学びを試みた。

<学びの方法>

- ①手や肩や背中などに触る内容があるので、学生自身がそのことが許容できる主体的な席替えをし、男女混合で二人ペアで座る。それぞれの課題に対して、先生役、子ども役をおこない、チェンジする。先生役は、教師として良いと考える方法をいろいろ試みる。
- ②子ども役は、その対応でどのように感じるかを伝える。
- ③ユマニチュードのメソッドを解説する。
- ④自分の感じたことと比較し、学びを小レポートにまとめる。

4.4.1 「見る」

課題1：「『自分はこのクラスにいないほうがいいのではないか…。』と感じている中学生をイメージします。その子に対して視線で

何かを伝えようとしてみてください。」

①教師としての方法

- ・相手の視線に入るようにまわりこむ。
- ・下から覗き込む。手を振ったり、あれこれ動いてみたりする。
- ・優しいまなざしを送る。笑顔も大事。

②子どもの感じ方

- ・「何？この人、うざい」と最初思っても、自分を気にかけてくれていると感じてきて、やっぱりうれしい。
- ・目が合った瞬間に、教師にそらされたらイヤな感じがする。
- ・こっちが目をそらしても視界に入ってきたら笑ってしまう。

③ユマニチュードのメソッド

- ・近づいて、正面から、水平に、長く見つめる。
- ・ベッドで寝ている人が壁側を向いていたらまわりこんで介護する。

④学び

- ・まわりこんだり、覗き込んだりして視線を合わせようとするのは同じ。
- ・一瞬「見る」だけでなく、笑顔や真剣さや長さで伝わるも変わる。
- ・近くにいるときには、次の言葉がけのタイミングも大事。

4.4.2 「話す」

課題2：「休み時間に泣いていた高校生をイメージします。1対1で事情を聞こうとしたら相談室までついてきてくれたけれど、入っても黙っているので、話し始める気持ちになるまでどうするか、やってみてください。」

①教師としての方法

- ・最初は簡単なことを話す。天気や好きな食べ物とか軽い話をする。
- ・自分の失敗談を話す。

- ・自分からどんどん話し続ける。
- ・そばによって視線を合わせ、いろいろしながら話す。
- ・話したくなるまで待つけど、場は明るい方がいいから和む話をする。自分は味方であることを伝える。
- ・返事はせかさない。
- ・名前を呼んで話す。

②子どもの感じ方

- ・来た時点で、少し心は開いている。
- ・せかされるとむかつくと思うけど、いろんな話をしながら、待ってもらっていたら、信頼してだんだん言う気持ちになってくる。
- ・自分のことを気にかけてくれていると感じる。

③ユマニチュードのメソッド

- ・視線が合ったら、2秒以内に話しかける。どんどん話し続ける。自分の行動を実況中継し（オートフィードバック）、言葉を絶やさず間をつなぐ。
- ・相手の返事や反応がないからといって無言で作業をすることのないようにする。
- ・気持ちが前向きになる話題を選ぶ。「パジャマが素敵ですね。」

④学び

- ・待つことも重要だが、むなしい時間が流れないように、自分は話し続けるのがいいと思った。
- ・カーテンを開けて窓の外を見て、ちょっと自分の話なんかもするといい感じになってくる。
- ・ひとりごとみたいに話すのもいい。

4.4.3 「触れる」

課題3：「気持ちの切り替えをするのが難しい発達上の障がい特性のある小学生をイメージします。運動会の練習で、みんながも

う運動場に行ったのに教室に残って座り込んでいる状況で『触れる』という行為をするときの方法や注意点を考えてください。」

①教師としての方法

- ・背中や肩をトントンとしてみる。
- ・手に優しく触れてみる。
- ・男女のことはやっぱり考える。気をつけないといけないと思う。

②子どもの感じ方

- ・いきなり触られるのは絶対イヤ。
- ・きつく握られて引っ張られるのはイヤ。
- ・手のひらを出して、優しく持たれるのは大丈夫。

③ユマニチュードのメソッド

- ・肩や背中など、敏感でないところから。飛行機の離着陸のように優しく触れる。わしづかみにしないように、親指は手のひらにつけて。5歳児以上の力が出さない。ひっぱる時は握らず支える感じ。

④学び

- ・セクハラにならないように気をつけることはやっぱり必要。
- ・肩をポンポンとして優しくポジティブに「行こう」と言ったら行ってくれそうな気がした。
- ・親指を手のひらにつけたら、ホントに強すぎないからいい。
- ・きつい力でされるのは、よけいに恐怖や抵抗の気持ちになる。
- ・中学生以上だったら、やっぱりあまり触れないほうがいいかも。

4.4.4 「立つ」

課題4：「ねそべっているときに上から話されるのと、いったん立ってみて話をするのと、子ども役はどんなふう感じがちがいますか。教師役はどんなふう感じますか。」(この課題は、学校現場では特殊な状況になるの

で、あえて具体的なイメージ設定をしない。)

①教師としての方法

- ・自分だけが立っていると、えらそうになるから、目の高さが合うほうがいい。

②子どもの感じ方

- ・自分が寝転んで低いときに上から話されると怒られているような感じがする。
- ・立ったほうがしゃんとする。

③ユマニチュードのメソッド

- ・寝たきりにさせず、できる限り「立つ」ことの援助をする。

④学び

- ・上から目線で話されると嫌だし、自分も立ったほうが話しやすい。

5. 考察

学生は、ユマニチュードの4つのメソッドに関係する課題の体感から、その哲学に近いことを見出していた。相手を大切だと思っている気持ちを何とか伝えるために、相手を心から尊重するために、どうすればいいのか、細かな方法としてユマニチュード入門に出てくるような注意に気づき表現していた。もちろん子どもたちへの接し方は認知症への介護状況とは異なる部分もあり、思春期だからこそ細やかな心配りが必要となることもあるが、その配慮の必要性自体に気づくことができるのも有用である。また、社会福祉部であるからこそいろいろな立場の人の気持ちを体験しながら感じて考える授業があるのかと記述した学生もいた。

以上のことから、大学の教員養成課程において、ユマニチュードの哲学を取り入れることは、相手を人として尊重し、心を開き、間に絆をつくろうとする教員に必要な資質能力を育てるために有効な方法と言える。今後、より経験の少ない学生の理解向上を促すよう

な授業教材、教具、提示方法等メソッドの開発と視覚化、及び学生自身の資質能力のメタ認知と、採用後の研修時の「目指す教師像」との関連効果の検証が必要であると考えられる。

6. まとめ

本研究では、現在認知症を中心としたケアの技術として効果を得ている「ユマニチュード」を哲学として捉え、小中高等学校の児童生徒を教育する教員養成に取り入れることの意義と可能性を考察した。今後の大学教職課程における「育成を目指す教師像」を可視化して活かすための知識を得ることを目的として、一例として社会福祉学部における教職課程の「教職概論」で、教育現場で見られる具体的場面の課題を解決する際にロールプレイによって体感したことをユマニチュードと比較する学びの中で、以下の知見を得た。

- 1) ユマニチュードの哲学を教育に取り入れることは、完全ではない人間を人として愛し尊重する教師の資質能力の育成に有効である。今後、この哲学を踏まえた、より具体的メソッドとしての可視化と教育方法を研究し進めることで、スパイラルに哲学の理解をさらに深める必要がある。
- 2) 採用後の教職員研修で都道府県及び市町村教育委員会が「必要とする教師像」との連携研究の必要性、すなわち、大学の教職課程にユマニチュードの哲学を導入した場合の「育成を目指す教師像」と、現場で必要とされている「教員養成指標」等のコンピタンスとの有効性の検証も検討されるべきである。

引用・参考文献

- 1) 本田美和子、イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ：ユマニチュード入門、6、医学書院、2014
- 2) イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ、ジェローム・ペリシェ著、本田美和子監修、辻谷真一郎翻訳：「Humanitude 老いと介護の画期的な書：トライアリスト 東京、2014
- 3) 坂本淑江：ユマニチュードのケアについての一考察：熊本大学学術リポジトリ、先端倫理研究、11、5-16、2017
- 4) 伊東美緒：多くの認知症ケア理論が存在するにも関わらずなぜユマニチュードが必要か、看護管理、23 (11)、922-926、2013
- 5) イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ、本田美和子：「ユマニチュード」という革命—なぜ、このケアで認知症高齢者と心が通うのか、217、誠文堂新光社、2016
- 6) 文部科学省：中央教育審議会初等中等教育分科会（第100回）配布資料 教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料1、2017
- 7) 『精神看護』（特集1 新しい認知症ケアメソッド「ユマニチュード」）、17（3）、8-30、医学書院、2014
- 8) Yves Gineste・Rosette Marescotti・Jerome Pellissier：Humanitude、2014
- 9) 南本長穂編著：新しい教職概論 教師と子どもの社会、59-67、ミネルヴァ書房、2016

